

地方小出版
情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 136円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

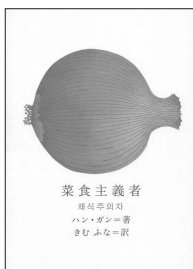
ハン・ガンさんのノーベル文学賞受賞によせて

文・クオンスタッフ 伊藤明恵

「今年はハン・ガンさんが取るんじゃないですか、ノーベル賞」。書店員さんからそう言われることがたびたびありました。『別れを告げない』（ハン・ガン著、斎藤真理子訳、白水社刊）を読み、同じ作家の別の本を読みたいという読者からお電話をいただき、「この人はノーベル賞を取りますよ」とまるでお告げのように言われたこともあります。そのたびに「いつか取ってもおかしくないですよ」と期待を込めて答えてはいたものの、その「いつか」が今年やってくるとは！

『菜食主義者』日本語版の刊行まで

クオンの設立は2007年ですが、実際に出版を手掛けるまでは著作権エージェント業務の割合が多かったと聞いています。満を持して「新しい韓国の文学」シリーズを立ち上げるにあたり、代表の金承福がぜひ01巻に据えたいと考えたのがハン・ガンさんの『菜食主義者』でした。翻訳家のきむ ふなさんからもこの作品を翻訳したいというお話があり、出版に向けて動き出しました。



【菜食主義者】
ハン・ガン著
きむ ふな訳
定価：2,420円
ISBN978-4-904855-02-7

連作小説集『菜食主義者』には韓国の文学賞で最も権威がある「李箱文学賞」受賞作が含まれており、韓国の文学ファンの間でその名前が知れ渡ってはいたものの、当時はまだ誰も読んで

ている作品ではありませんでした。けれどもこの小説の良さは日本の読者たちにもきっと伝わるはずだと信じていた金は、従来の韓国文学のイメージにとらわれることなく広く手に取ってもらいたいと、デザイナーの寄藤文平さんと鈴木千佳子さんに装幀を依頼します。そしてうまれたのが、鈴木さんが描き下ろした玉ねぎが中央に配された鮮烈なカバーデザインです。2011年の初版刊行からすでに10年以上経っているにもかかわらず、今なお新しさを感じます。

印刷前に日本語版のデザインをご覧になったハン・ガンさんは、正直戸惑われたようです。原書と同じエゴン・シーレの絵を装画として使ってほしいというリクエストがハン・ガンさんサイドからあったものの、金は日本の読者たちはこのようなシンプルなものをお好むと説明し、鈴木千佳子さんの装画で進行しました。今でこそハン・ガンさんも公の場で「[海外で]本が出る度に様々な独特の個性があって興味深いです」と笑いながら語っていますが、当時はどれだけやきもきしただろうと想像します。

著者来日イベントの開催

『菜食主義者』日本語版は、金の熱意

を書店員の方が受け止めて店頭で大きく展開して下さったり、大手新聞各紙に書評が載ったりと、刊行直後から話題になりました。装幀も大好評で、ある書店員さんが後年、「新しい韓国の文学」シリーズを面陳しはじめてから海外文学コーナーに立ち寄る女性が増えたと教えてくれたほどです。

2013年に開かれた東京国際ブックフェアはテーマ国が韓国で、李承雨さん、吳貞姫さん、キム・ヨンスさん、キム・エランさん、ク・ヒョソさん、パク・ソンウォンさんとともにハン・ガンさんも来日。東京ビッグサイトの会議室で「韓国の文学は今」と題する連続セミナーが開催され、ハン・ガンさん



東京国際ブックフェアにて(2013年)。写真左からハン・ガンさん、吳貞姫さん。

は吳貞姫さん、中上紀さんと共に「女性のアイデンティティと文学」に出演されました。

私は当時出版とは別の業界におり、平日の日中開催されたこのセミナーには参加できなかったのですが、韓国文学のいちファンとしてブックフェア会場を訪れた時の熱気はいまでもよく覚えています。そしてこの時の一連の企画にも金が関わっていたことを後から聞き、驚きました。

振り返ってみると、『菜食主義者』に限らず韓国の現代文学は——少なくともクオンが出してきた本は——隠れていたわけでもなく、発見されるのを待っていたわけでもなく、作品の魅力に触れることができるイベントや企画が積極的になされていたと思います。本が刊行されると作家来日イベントが開かれ、谷川俊太郎さん、平野啓一郎さ

ん、中島京子さんといった錚々たる方たちが対談相手として出演していました。ハン・ガンさんのエッセイが資生堂の広報誌『花椿』に掲載されたこともあり。またクオンのオフィスでは定期的に読書会が開催され、翻訳者や編集者の方たちと一緒に作品について語り合うことができました。作り手と読み手という区別はほとんどなく、作品が好きだという気持ちがあればだれでも入ってくるができる場でした。読書会や金のトークイベントには、遠方から駆けつけた参加者の姿もありました。それだけに、取材で「いつ頃から韓国文学の人気が出始めたのですか？」と訊かれると、こう答えたくります。「ずっと人気があったんですよ！」

韓国文学への注目の高まり

日本語版の刊行から5年後の2016年に、『食業主義者』英語版が国際ブッカー賞を受賞しました。この時に驚かれたのが、日本語版がすでに出ているということでした。前年に『カステラ』（パク・ミンギユ著、ヒョン・ジェフン、斎藤真理子訳、クレイン刊）が日本翻訳大賞を取ったこととあわせて、韓国文学への関心を高めるニュースとなったことは間違いありません。

これにより書店でのフェア開催や取材が増えるようになったものの、今思い返してみると当時は韓国を<近くて遠い国>と紹介するものが多かったように思います。まだ心理的に<遠い>と感じる人が少なくなかったのかもしれない。

2016年10月に、ハン・ガンさんの邦訳第2作となる『少年が来る』（井手俊作訳）を刊行しました。1980年に起きた光州民主化抗争（光州事件）を扱ったもので、執筆中にたびたび悪夢にうなされたということも理解できるほど、軍隊の弾圧により命を落とした少年をはじめさまざまな立場の人たちの声がハ



【少年が来る】
新しい韓国の文学 15
ハン・ガン著
井手俊作訳
定価2,750円
ISBN978-4-904855-40-9

ン・ガンさんの筆を通して静かに、深く、重く響きます。読み終わってもなお、その声が自分の中から聞こえてくるような感じを覚えるほどです。

この本は新刊として書店店頭に並ぶ時期を過ぎてから、たびたび動きが活発になりました。その一つは、2018年に映画「タクシー運転手 約束は海を越えて」が日本で公開された時です。映画を観た人たちがもっと光州事件のことを知りたいと、この本を手にとってくれました。そしてもう一つの動きが、BTSのファンの皆さんが関心を持ってくれたことでした。彼らの楽曲『Ma City』で歌われていることと『少年が来る』はかかわりがあると知ったARMYの方たちが熱心に読み、その感想をシェアしてくれるようになりました。どちらの動きも、自分たちが知らなかった韓国の現代史をもっと知りたい、理解したいという熱意に満ちた時代からの変化を感じます。

今回のノーベル文学賞受賞後も、皆さんが「おめでとう」だけでなく「嬉しい」とおっしゃっていたことが印象的でした。ハン・ガンさんの作品への愛情がSNS上にあふれていたあの晩のことは、忘れることはできないと思います。

ハン・ガンさんを「聴く」

先に東京国際ブックフェアに来日されたと書きましたが、その後もオンラインでのイベントでハン・ガンさんは日本の読者に語り掛けてくださいました。その一つである2020年のK-BOOKフェスティバルでは、当時執筆していた『別れを告げない』をはじめとするご自身の作品について、創作についてじっくり語りくださいました。この時のアーカイブ動画はノーベル文学賞の受賞



2020年のK-BOOKフェスティバルにオンライン出演したハン・ガンさん。

記念で期間限定公開され、すでに2万回以上再生されています。

イベント以外にもハン・ガンさんを<聴く>ことができるコンテンツに、朗読そして歌があります。2018年にクオンから出版した『そっと 静かに』（古川綾子訳）は音楽をテーマにしたエッセイ集で、原書には著者自ら作詞・作曲・ボーカルを務めた楽曲のCDが付いていました。日本語版ではハン・ガンさんがこの本のために選んだ朗読や曲へのリンクをつけています。



【そっと 静かに】
新しい韓国の文学 18
ハン・ガン著
古川綾子訳
定価2,420円
ISBN978-4-904855-70-6

また、2021年に斎藤真理子さんときむ ふなさんの共訳で詩集『引き出しに夕方をしまっておいた』を刊行した際には、新たに5篇の詩を朗読してくださいました。現在もYouTubeで公開していますので、ぜひお聴きください。



【引き出しに夕方をしまっておいた】
セレクション韓・詩01
ハン・ガン著
きむ ふな訳
斎藤真理子訳
定価2,420円
ISBN978-4-910214-28-3

終わりに

ハン・ガンさんはトークイベントなどの締め、たびたび、本の中でお会いしましょうと語っています。ハン・ガンさんの作品がもっとも多く訳されているのは日本語ですが、それでもなお未邦訳の作品が数多くあります。これから新たに発表される作品も含めて一作品でも多く、深い愛情をもって日本語圏で読まれることを願っています。

*

(いとうあきえ／クオンスタッフ)



新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『思ひ出の記』 ●小泉節子 著



小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の『怪談』が出版されてから今年で120年。出版後、半年余りで急逝したため、同じく没後120年となる。『怪談』の成立には妻セツの存在が欠かせない。幼い頃から物語を聴くのが大好きだったセツは、いつしか語り部の素養を身につけ、リテラリー・アシスタントとして、夫の再話文学創作の最大の功労者となる。「思ひ出の記」はセツがハーンと過ごした13年8ヶ月の日々を、夫の没後に回想した記録。今回は記念出版であり、一部の旧字や旧仮名づかいを改めた新装版となっている。そこではハーンはヘルンと呼ばれ、互いを「ママさん、パパさん」と呼び合い、仲睦まじい様子が伝わってくる。「ヘルンはごく正直者でした。微塵も悪い心のない人でした」という人柄、「怪談の書物は私の宝です」というほどの怪談好き、

書く時間を惜しむ余り、面倒な人づき合いを避ける偏屈さもあるが、休む時は必ず「プレゼント・ドリーム（よい夢を）」と言ひ合い、セツの夢の話を楽しみにしていた。桜の花の返り咲き、長い旅の夢、松虫といった死の前兆を思わせるエピソードも切ない。他に初翻刻となる母方の祖父塩見増右衛門の口伝「オヂイ様のはなし」、幼い時、出雲でフランス人から虫眼鏡をもらい、西洋人に厚意を持たたからこそ、ヘルンと夫婦になれたかもと回想する「幼少の頃の思い出」の手記2本も収録。解説は小泉八雲記念館館長でセツの曾孫の小泉凡。2025年秋のNHKの朝ドラのモデルとしても注目を集めている。(Y)

◆1600円・118mm×188mm判・133頁・ハーベスト出版・島根・202409刊・ISBN9784864565332

『ユタに生きる 上巻』 ●円聖修 著

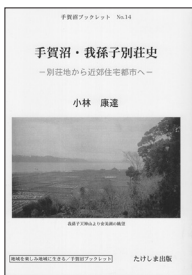


著者の前著『奄美少年 ユタへの道』では、シャーマニズムの伝統が残る奄美において、シャーマンの資質を持って生まれた著者が体験した不可思議な現象を中心に、ユタへと目覚めていく少年時代の過程が描かれていた。本書では、高校卒業後に奄美を離れ、上京してから体験してきたことがまとめられている。読者としては著者の見霊的能力や神秘的な事象に目が奪われがちになる。例えば、腹痛に身悶える女性の背中に「白いツボ」が視えてきてそれを押すと、何事もなかったように腹痛がおさまったり、女性とともに著者本人もおおいに驚いたり、また、なぜか偶然乗りおくれたしまった飛行機が大きな事故に見舞われたことを後で知ったり、あるいは知人の「前世」を垣間見たり…等々。しかし、「ユタの道を歩みながら、自

分自身も研究者の思考でユタとは何かを求め続けてきた」と自身書いているように、単なる体験談を超えて、ユタの本質論あるいは概論的な一般化へと舵が切られていく後半こそ注目すべき、と思える。例えば「第二章 成巫過程」では、正式なユタになるための様々な儀礼的な過程が描かれ貴重である。また、「第四章 琉球列島ユタの調査の旅」では、他の地域のユタたちのことを知るために、沖縄本島や宮古島などの地を訪ねて歩く。そして、「第五章 ユタたちの神ざわりと神がかりの調査」では、ユタ資質の発現（神ざわり）が精神疾患と見做されたある少女の悲劇をもとに、神ざわりと精神疾患の明確な相違について考究されている。(N)

◆1800円・B6判・222頁・南方新社・鹿児島・202410刊・ISBN9784861245183

『手賀沼・我孫子別荘史』 ●小林康達 著



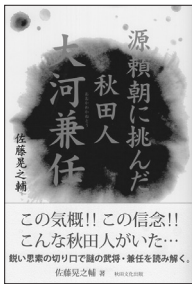
我孫子という地名で連想するのは白樺派と手賀沼の花火そして、座席に座れる常磐緩行線始発駅。本書はそんな評者の貧困なイメージを覆す会心の一冊だ。明治29年我孫子駅の開業により、富裕層や、白樺派の文人・芸術家から手賀沼の水景が美しい別荘地として注目される。以上が第4章までの概略だが、本書の魅力は第5章以降の住宅都市としての発展とその光と影の部分にある。大正2年、沼畔に別荘を設けて間もない杉村楚人冠は千葉県による手賀沼の干拓計画を知り、自然と景観を活かした町の発展を構想し異を唱える。そして関東大震災を機に我孫子に定住し、手賀沼保勝会の結成を企てる。地元の反対もあり結成は見送ったが、楚人冠が立ち上げた湖畔吟社や村の会を通じて地元民との交流は深まり、昭和に入り地元青年有

志による我孫子風致会として実を結ぶ。楚人冠は昭和20年に亡くなるが、戦後、沼の東側が干拓され面積は半減し自浄能力は低下、宅地化による家庭排水の増加で手賀沼の汚染が深刻化する。

現在は利根川の水を流し入れ浄化を図る北千葉導水路により、全国湖沼水質調査のワースト1は脱却したが、汚染に危機感を強めた地元民や自治体による廃食油の回収と石鹼製造、家庭での雑排水減量、学校での環境教育、沼や川の清掃、アオコ回収などの活動も浄化に寄与していると思う。著者の言う「『市民のつくる…』の伝統」は、楚人冠がくれた最高のプレゼントだったのかもしれない。(石井一彦)

◆1600円・A5判・215頁・たけしま出版・千葉・202409刊・ISBN9784925111775

『源頼朝に挑んだ秋田人 大河兼任』 ●佐藤晃之輔 著



大河兼任は、平安末期から鎌倉初期にかけて秋田県八郎瀧東岸部を治めていたとされる武将で、奥州合戦で藤原泰衡が源頼朝に敗北し、奥州藤原氏が滅亡したことから、主君の仇である頼朝に反旗を翻した。いわゆる「大河兼任の乱」の首謀者だが、その実像は謎に包まれている。

本書では、秋田県大瀧村に住む著者が、大河兼任のことを記した市町村史など22冊の書籍を比較して内容をまとめ、支配地、本拠地、出生、乱に係わるキーワード（秋田大方の場所、志加渡の解釈、進軍が遭難した場所など）について、検証を進めている。謎に迫っていくうちに著者は「兼任は、気骨のある秋田人」と思うようになっていく。

兼任の乱で象徴的な「七千余騎の進軍が秋田大方の志加渡の途中、氷が消えて五千余人が溺

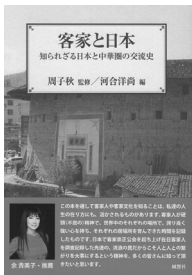
死した」という一節の解釈では、著者は「大方＝八郎瀧」、「志加渡＝鹿渡」（地名説）、「溺死五千余人には大きな疑問があり、実際は五十人程度ではないか」としている。

本書を読んでいると、著者が喜びの中で本づくりをしている姿が目に見えてくる。調べ物を続ける中で、同じ事柄に関心を持つと出会い、話をし、理解が深まっていくことの喜びは、すべてのことに共通する。この本をきっかけとして、兼任を知った読者もいるのではないだろうか。ネットの検索での情報とは異なる、書籍を持つ魅力が感じられる良著である。

(HEYANEKO)

◆ 1350円・四六判・165頁・秋田文化出版・秋田・202410刊・ISBN9784870226197

『客家と日本』 ●河合洋尚 編

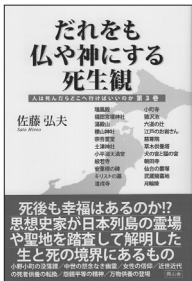


客家（はっか）は福建省など中国東南部を本拠地とする漢民族の支系である。近年ユネスコの世界遺産に登録された円楼と呼ばれる巨大な円形集合住宅で知る人も多いことだろう。団結心と行動力に富み、華僑の一派閩を形成している。世界の政治・経済に隠れた影響を与えたことから「東洋のユダヤ人」とも呼ばれるという。孫文や鄧小平、シンガポール初代首相リー・クワンユー、タイ元首相タクシン・チナワット、台湾元総統李登輝と蔡英文、タイガーバームで大富豪になった胡文虎、タヒチの真珠王ロバート・ワンと聞けばなるほどと思う。客家と日本はどのようなつながりがあったのか。記録に残る客家最初の来日者は、1887年清の初代駐日公使何如璋で、見聞記『使東術略』を遺している。随行した書記官の黄遵憲も40巻の大著『日

本国志』を記した。共に当時の中国人の日本への関心と理解のありようがわかる重要史料である。伝説レベルでは新宮市など日本各地に残る徐福崇拝も客家から出ている。日本では台湾客家との関係が特に強い。日本統治下で、多くの客家エリートが留学生としてやってきた。甲子園で準優勝した嘉義農林学校の呉明捷は、早稲田大学に進んで六大学野球でも活躍し、ビジネスマンとして東京で生涯を全うした。統治下に「美濃」と改称された台湾南部の町では、今も美濃紙傘が客家の工芸品になっている。女優范文雀と従妹の余貴美子も客家をルーツとする。随所にコラムを挟んだ分かり易い解説で、客家が急に身近なものになった気がする。（飯澤文夫）

◆ 900円・A5判・95頁・風響社・東京・202408刊・ISBN9784894893665

『だれをも仏や神にする死生観 一人は死んだらどこへ行けばいいのか3』 ●佐藤弘夫 著



「人は死んだらどこへ行けばいいのか」というコンセプトのもと日本各地の社寺、聖地を巡り、この国の人々の死生観、他界観の変遷を辿るシリーズの第三巻目となる。伊達政宗の霊廟である仙台の瑞鳳殿をはじめ、東京四谷のお岩稲荷、今も衣類を奉納する習俗が絶えないという三重県の朝田寺など、訪れる聖地に固有な葬送と供養のあり方、死者と生者が交流する作法の多様性には興味が尽きない。本シリーズを通してのことであるが、著者がそれぞれの聖地に繰り返し見出すのは、中世から近世へと変化する死生観、他界観の「地層」である。浄土信仰が広がりを見せ、聖地が彼岸の浄土への入口である「この世の浄土」と見做されるようになった中世に対して、社会の安定が「彼岸の世俗化」をもたらし、他界浄土がリアリティーを失う中

で、死者たちが見知らぬ遠い浄土ではなく、慣れ親しんだこの世の近くにとどまるようになるのが近世である。著者によれば「先祖が山に住む」という考えは、柳田國男が言うような古来のものではなく、江戸期以降のものなのである。そして、本巻で特に多く取り上げられるようになったのが、自ら人柱となった義人が神として祀られる青森県の福田宮堰神社や、直訴によって領民の窮状を訴えた佐倉惣五郎の御霊が本尊となった千葉県宗吾霊堂など、人が神になって祀られているような聖地である。山口県の櫻山神社では、このヒトガミ生成のメカニズムが近代以降、国家に回収、独占されていく過程が考察される。（岡安 清）

◆ 2100円・B6判・265頁・興山舎・東京・202410刊・ISBN9784910408521

『ちいさなまちの素朴湯』 ●松本康治 著



旅先銭湯の別冊第2号が出版されました。今回の旅の舞台は東北。そのタイトルは『ちいさなまちの素朴湯 みちのく編』となっております。素朴湯とはザックリ言うと公共交通機関で行けて、人々が暮らす集落や街の中にあり、地域住民が日常的に愛用するごちんまりとした浴場とのこと。というわけであつみ温泉・飯坂温泉・鳴子温泉など全国的にも名の知れた温泉地も登場しますが、そこで紹介されているのは温泉旅館のようなところではなく、あくまで地元の人たちが利用する浴場となっています。

上に挙げたあつみ温泉では、3か所の共同浴場を巡っていますが、いずれもごちんまりとした浴槽がひとつだけのいかにも地元の人向けといった感じの浴場です。お風呂に入ろうとしたら、先客のお兄ちゃんがお風呂場の説明をして

くれたり、地図を眺めていると「共同浴場をお探しですか？」と声をかけられたりと、さりげない地元の人たちとの交流も素朴湯の魅力のひとつかもしれません。そしてどの浴場も地元の人に長く愛されているだけあって、レトロな雰囲気や漂っているところも数多く、いつまでも続いてくれたらうれしいなあと思う景色もそこにあります。

もちろん泉質やお湯の感触はその土地ごとに個性があります。ヌルヌル湯がドバドバの姉戸川温泉やほのかな石油の香りのする新津温泉など面白そうな浴場が目白押し。読めばきっと浸かりに行きたくなる素朴湯おくのほそ道をぜひご堪能下さい。(副隊長)

◆1400円・A5判・111頁・さいろ社・兵庫・202410刊・ISBN9784916052797

『山陰本線写真集 島根編』 ●今井出版 編



すでに鳥取編が出ていた山陰本線写真集に、島根編が新たに加わりました。東は安来駅から西は飯浦駅まで、東西に伸びる島根県を駆け抜ける多くの列車の姿が収められています。特に安来駅から松江駅を経て西出雲駅に至る東半分は電化されているのが特徴です。ここを走る列車は山陰本線を走る気動車に加え、伯備線からやってくる特急やくも号・サンライズ出雲号・黄色一色に塗られた普通列車など多士済々です。逆に西半分は非電化で気動車の独壇場。普通列車は小ぶりの気動車が1両、特急列車でも2〜3両編成での運転となるなど、一気にローカル線の色が濃くなります。

そして車窓の風景も東の出雲と西の石見では大きく異なります。出雲では山陰随一の名峰大山を

背景に、中海や宍道湖の穏やかな湖面を望みながら走ります。国宝松江城を横目に走る列車の姿も絵になりますね。夏には緑に、秋には黄金色に染まる水田も出雲路の車窓の特徴です。石見に入ると車窓の主役は海。山陰本線は青々とした日本海に沿って走るようになります。特に2本の青い帯を車体にまとった小柄なキハ120形気動車が1両で海辺を走る姿は大海原とのコントラストが際立ちます。また普段は目にする事の少ない事業用車両の写真や、ブルートレイン時代の寝台特急出雲号・寝台急行だいせん号など懐かしの車両の写真もあります。人々の暮らしと厳しい自然の中を走り続けてきた島根の山陰本線の美しい姿を十二分に楽しめます。(副隊長)

◆2500円・240mm×250mm判・107頁・今井出版・鳥取・202410刊・ISBN9784866114026

地小出版

流通センター

ジャンル別
新刊案内

2024年10月1日〜31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆kappo vol. 132 2
024年11月号 プレスアート編
298mm×230mm 103頁 800円

円 プレスアート [宮城] 978-4-503-23176-5 24/11

◆S-style 2024年11月
vol. 719 プレスアート編
280mm×210mm 112頁 600円
円 プレスアート [宮城] 978-

4-503-23185-7 24/11

◆GREEN REPORT 538
2024年10月号 廣瀬 仁編
A4 191頁 2800円 地域環境
ネット [埼玉] 978-4-909864-70-3 24/10

◆かまくら春秋 No. 654 2
024年10月号 伊藤 玄二郎編
B6 107頁 327円 かま
くら春秋社 [神奈川] 978-4-7740-0910-0 24/10

◆道 No. 222 木村 郁子編
210mm×275mm 74頁 114
3円 どう出版 [神奈川] 978-4-910001-48-7 24/10

◆AXIS Vol. 230 2
024年10月号 徳山 弘基編

売行良好書

期間：2024年10月15日～11月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

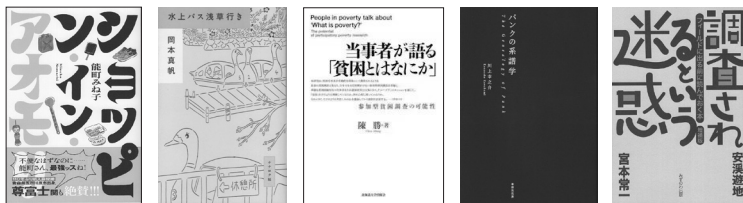
【出荷センター扱い】

- (1)『菜食主義者』2,200円・クオン (2)『少年が来る』2,500円・クオン (3)『未来ちゃん』3,700円・ナナロク社 (4)『そっと静かに』2,200円・クオン (5)『あなたのための短歌集』1,700円・ナナロク社 (6)『東京子ども図書館50年の歩み』1,600円・東京子ども図書館 (7)『塚本邦夫歌集』2,600円・書肆侃侃房 (8)『徴兵体験百人百話』1,500円・17出版 (9)『知のアトラス』1,000円・花乱社 (10)『ショッピング・イン・アオモリ』1,800円・東欧日報社 (11)『たぶの里』1,200円・ナナロク社 (12)『追跡・鹿児島県警を暴け』1,800円・南方新社 (13)『ここは自信をとり戻す学校』1,500円・忘羊社 (14)『明治の大獄』2,100円・弦書房



【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1)『ショッピング・イン・アオモリ』1,800円・東奥日報社 (2)『水上バス浅草行き』1,700円・ナナロク社 (3)『当事者が語る「貧困とはなにか」』5,800円・北海道大学出版会 (4)『パンクの系譜学』2,600円・書肆侃侃房 (5)『調査されるといふ迷惑 増補版』1,500円・みずのわ出版 (6)『新版改訂 高尾山登山詳細図 全132コース』1,200円・吉備人出版 (7)『あおむけの踊り場であおむけ』1,800円・書肆侃侃房 (8)『老人ホームで死ぬほどモテたい』1,700円・書肆侃侃房 (9)『新版 奥多摩登山詳細図 東編 全148コース』900円・吉備人出版 (10)『井の頭公園いきもの図鑑 改訂版』1,800円・ぶんしん出版 (11)『考える農家 農業大転換期』1,400円・まつやま書房 (12)『沖縄の身近な植物図鑑』4,500円・ボーダーインク (13)『二ホンウナギ読本 ウナギの“想い”を探る』1,200円・花乱社 (14)『大菩薩連嶺 中央線沿線の山 登山詳細図 全184コース』1,400円・吉備人出版 (15)『新版 奥多摩登山詳細図 西編』900円・吉備人出版



以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
 URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local_small

トピックス — ★★★

▼今号の1面は、韓国文学専門出版社クオンで実務を担当されている伊藤明恵さんにご寄稿いただきました。この15年日本でハン・ガンさんはじめ韓国文学が徐々に読まれるようになっていった背景が読み取れるように思います。ご多忙のところご寄稿いただいた伊藤さんにはこの場で感謝申し上げます。ありがとうございます。さて、そのハン・ガンさんのノーベル文学賞受賞というインパクトはすさまじく、10月末に増刷となった代表作『菜食主義者』(本体2,200円 ISBN9784904855027)と光州事件に取材した『少年が来る』(本体2,500円 ISBN9784904855409)、そして11月中旬増刷となったエッセイ集『そっと静かに』(本体価格2,200円 ISBN9784904855706)、詩集『引き出しに夕方をしまっておいた』(本体2,200円 ISBN9784910214283)は4点とも再び品切れとなり、次の増刷は11月末になるとのことです。

▼福岡の書肆侃侃房刊『私が諸島である』(中村達著 本体2,300円 ISBN9784863856011)が第45回サントリー学芸賞(思想・歴史部門)を受賞されたとのこと。これは「西洋列強による植民地支配の結果、カリブ海の島々は英語圏、フランス語圏、スペイン語圏、オランダ語圏と複数の言語圏に分かれてしまった。それらの国々をそれぞれ孤立したものとしてではなく、諸島として見るということ。カリブ海をひとつの世界として認識し、その独自の思想を体系化する」(書肆侃侃房サイト『私が諸島である』紹介文より)。サントリー学芸賞は、評論・研究活動を幅広く顕彰する賞で1979年に創設、「政治・経済」「芸術・文学」「社会・風俗」「思想・歴史」の4つの部門があるとのこと。



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

ジュンク堂書店 池袋本店

淳久堂書店

営業時間：午前10時～午後10時

池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022
 東京都豊島区南池袋 2-15-5
 TEL 03-5956-6111
<http://www.junkudo.co.jp>

